

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	価値的・態度的側面のみならず、知識的側面や技能的側面に関する指導がバランスよく行われ、実践力・行動力の育成につながっている事例
-------	---

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

茨城県つくば市

○学校名

つくば市立並木小学校

○学校のURL

<http://www.tsukuba.ed.jp/~namiki-e/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 15学級 【特別支援学級】 3学級 【合計】 18学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 438人（平成27年11月10日現在）
（内訳：1学年68人、2学年82人、3学年74人、4学年85人、
5学年66人、6学年63人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26・27年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

共に学び、共に成長する学校 ～いい顔のある学校の創造～
・健康な子 ・勉強する子 ・仲良く助け合う子

【人権教育に関する目標】

互いのよさを認め合い、共に成長する児童の育成
～支え合い高め合う協働的な学びを通して～

○人権教育に係る取組一口メモ

他者との関わり合いや認め合いを重視した教育活動を行うことで、互いを尊重し合い、共に努力し磨き合っていける児童の育成

○人権教育にかかる取組の全体概要

- 1 支え合い高め合う協働的な学びを目指した授業実践
- 2 一人一人を大切に環境作り
- 3 自分を大切に、周りの人を大切にする活動（ハートフル活動）による取組
- 4 小中一貫教育桜並木学園としての取組

3. 特色ある実践事例の内容

(取り組みのねらい、目的)

児童にとって、日々の学校生活で大きな割合を占めるのが授業である。本校ではその授業を通して、目指す児童の育成を図ることが重要と考えた。そのために、「支え合い高め合う協働的な学び」を目指して授業研究を実施してきた。授業を組み立てるに当たっては、みんなで学ぶことのよさが味わえる学習活動づくり、互いの考えに共感しつつ可能性を磨いていく学習活動づくりを工夫している。一人一人を大切にする学年・学級の雰囲気をつくり、その中で様々な活動を通して仲間と関わり合うよさを味わわせることによって、互いを認め合い、共に成長することのできる児童の育成を図っている。

(取組を始めたきっかけ)

平成26年度より茨城県教育委員会から人権教育研究指定校の指定を受け、人権教育を通して目指す児童の姿に近づくため、本校の実態に照らし合わせ「自己肯定感」「回復力」「コミュニケーション能力」という3つの資質・能力を設定し、実践を重ねている。

(取組の内容)

(1) 第4学年 つくばスタイル科「情報モラル」

※つくばスタイル科：教育課程特例校指定による「つくば次世代型スキル」の育成を目指した独自の教育課程。(総合的な学習の時間を主体とし、道徳・特別活動の一部、1年生からの外国語活動を加えて編成した新教科)

単元 「メールを気持ちよく使うには (メールの書き方)」

ねらい 体験を通してだれが見ても気持ちのよい内容や言葉遣いのメールを書くことが大切であることを知る。

人権教育の視点

- ・ 相手の立場に立って行動し、お互いによい関係を築いていこうとする態度を養う。(価値的・態度的側面)
- ・ 情報発信による他人への影響について知り、情報社会で自他の権利を尊重することの大切さを理解する。(知識的側面)

主な活動

- 1 自分のスタディーノートのメールを確認する。
- 2 メールの内容や、受信したときの気持ちなどを話し合い、デジタル思考ツールに入力し、検討及び課題を見付ける。
- 3 パワーポイントで、メールについての社会問題を学習する。
- 4 デジタルコンテンツでメールについての疑似体験を行う。
- 5 ワークシートに気持ちのよいメールにするために修正をし、書画カメラで比較検討を行う。
- 6 学習したことを生かして、友達に気持ちのよいメールを送る。



成果

- ・ 導入段階で、個人のスタディノートにメールを送信することでより体験的にメールについて捉えることができ、受信したときの気持ちに共感できた。また、デジタルコンテンツを用いた疑似体験で、どのような言葉を使うとだれが見ても気持ちのよいメールになるかを考えることで、自他の権利を尊重しながら情報を発信することの大切さを理解できた。
- ・ グループ交流では多様な友達の意見を受容し合い、クラス全体で共有することで、同じ事象に対しても多様な捉え方があることに気付き、互いを尊重しよりよい関係を築いていこうとする態度を養うことができた。

(2) 一人一人を大切にしたい環境づくり

自他のよさに気付き、互いに認め合いながら温かな気持ちで学校生活を送ることができることを目指している。そのために、温かな言葉かけの試みや思いやりの心を育むことを意識した取組を行ってきた。こうした活動をもとにして「環境整備部」では、各教室に人権のコーナーを設置した。さらに、ハートフルランドという全校児童が人権を意識し共有できるスペースを設けることで、児童たちが学年の枠を越えて積極的に交流し合える場をつくり、児童の相互理解の促進を図った。

① 「ハートフルがい〜っぱい！！」(技能的側面)

『ハートフルがい〜っぱい！！』は、各学級にある『すてきカード』の全校版である。クラスの友達だけではなく、他学年・他学級の友達への感謝の気持ちやよいところを伝え合う場としている。子供たちが書きたい！と思ったときにすぐ書けるように、鉛筆やすてきカードなどを常時用意している。他学年・他学級の友達から書いてもらったカードを見つけると、子供たちはとてもうれしそうな顔をしている。



自分の学級だけではなく、他学年・他学級の友達にも目を向け、気持ちを伝え合うことで、お互いを認め合い、自己肯定感が高められるコーナーを目指している。

② 「思いやりの本コーナー」(価値的・態度的側面)

ハートフルランドの中には、1年生から6年生まで全ての子供たちが、「人権とは何か」を、より身近に意識し、気付き、考えていくきっかけとなれるよう、様々な種類の人権に関する本を展示している。子供たちの発達段階に応じて、低学年向けには心が温かくなる話が載った短編集や絵本、高学年向けにはバリアフリーや命を題材とした本を選定した。



また、子供たちが本に興味をもち、思わず本を読みたくなる工夫として、それぞれの本にはあらすじやキーワード、心に残る言葉が書かれた紹介カードを添えている。休み時間には、読書好きな子供たちが足を運び、紹介カードをきっかけにして、本を手にとって熱心に読みふける姿を見ることが出来る。

③ 「あなたならどうする？」（技能的側面）

ハートフルランドには、「あなたならどうする？」コーナーを設けている。身近な生活場面を想定し、自分ならどんな言葉をかけるのかをその場に立って考えさせる機会としている。それにより、温かみのある助け合いができるようにし、相手を思いやる行動の実践につなげている。考えさせる場面設定では、授業、休み時間、給食の時間など児童が生活で遭遇しやすいものとした。また、吹き出しをワークシートにして印刷し、児童が記入できるようにすることで、モデル提示の言葉だけではなく自分の言葉として表現できるようにした。友達を認める、助ける、励ますなどの実践的態度を育てている。



(3) 人権集会

集会名 桜並木学園ハートフルフォーラム

ねらい 人権集会を通して児童生徒の人権意識を高め、差別やいじめをしない・させない・許さないという心情を育て、思いやりや優しさのあふれる学校・学園をつくろうとする態度を養う。

学園内各校の代表学年が一堂に会して集会を行うことにより、学園としてのまとまりや仲間意識を育てるとともに、人権に関する実践の共通性や一貫性が高められるようにする。

人権教育の視点

- ・ いじめが人権の課題の一つであることに気付き、人権を尊重することの大切さを理解できるようにする。(知識的側面)
- ・ 自分とともに他者も大切な存在であることに気付き、互いの気持ちに共感しながら支え合い高め合おうとする姿勢を育てる。(価値的・態度的側面)

主な活動

- (1) はじめのことば
- (2) 出会いの歌「ともだちになるために」
- (3) 出会いのエクササイズ「いろいろ握手」
- (4) 実践発表（各小学校の実践発表と中学生からのアドバイス）
- (5) パネルディスカッション
「桜並木学園の人権宣言をつくろう」
- (6) 感想発表（各校から）
- (7) 学園代表校長先生の話
- (8) おわりのことば



成果

- ・ 話し合いを通して、人権に対する関心が高まり、「桜並木学園人権宣言」をまとめて、学園共通の意識をもつことができた。
- ・ 異なる学校や異なる学年の人との交流や話し合いを通して、ものの見方や考え方を広げたり、異なる意見にも耳を傾けたりすることの大切さに気付くことができた。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(取組を実施する際に生じた課題)

グループでの話し合い活動は活発に行うことができ深まりも見られるが、考えの集約のさせ方や深め方が課題となった。

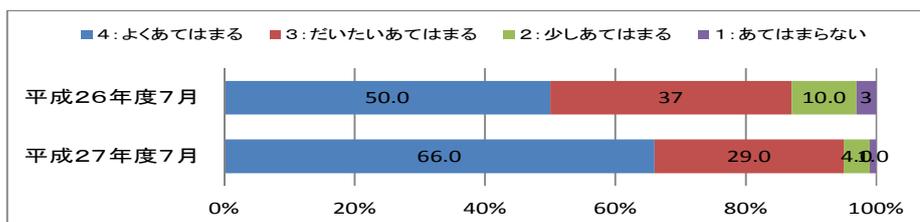
(課題に対する解決方法)

目的をはっきりさせた話し合いができるようにする。また、児童が活動を振り返りやすいようにワークシートを工夫する。

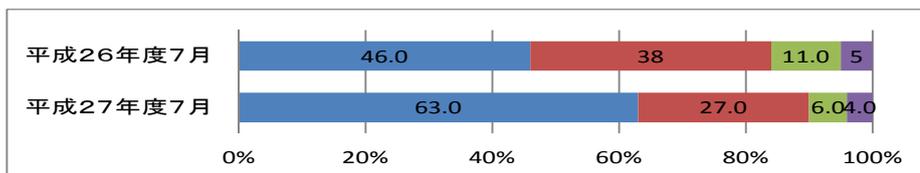
5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

① 自分にはよいところがあると思う。



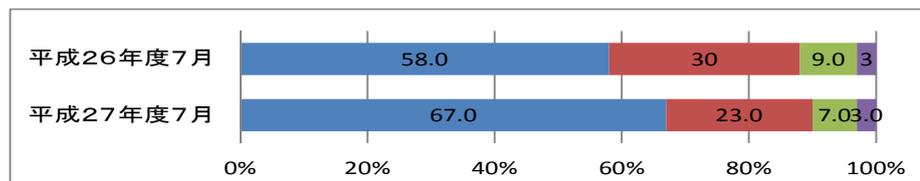
② 友達から認められている。



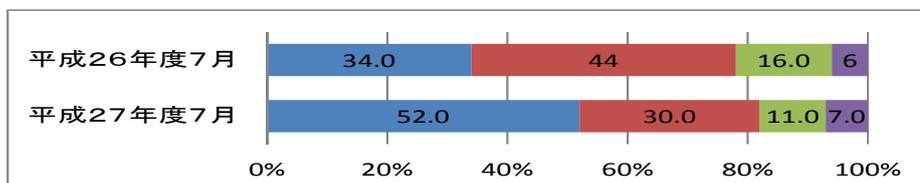
③ 自分を大切にしている。



④ 自分の長所も短所も分かっている。



⑤ 誰かの役に立っていると思う。



⑥ 物事を最後までやり遂げてうれしかったことがある。



○ 自分のよさや友達のよさに気づき、お互いを認め合えるようになったため、自尊心が高まってきている。これは、協働的な学びや話し合い活動の重視により、友達

の意見を聞く大切さを実感し、聞き合う態度が身に付いたからだと考えられる。

(①より)

- 他者から認められる経験を重ねることで、自信をより確かなものにするのができ、自己有能感の高まった児童が増えた。(②③より)
- 長所・短所も含め自分に対する肯定的なイメージをもてるようになった児童が増えてきた。これは、よいところ探しの積み重ねや相互評価の機会を増やしたことなどにより、四つの自己肯定感(自己効力感、自己有用感、自己有能感、自尊感情)とともに回復力が高まったことによると考えられる。(④より)
- 活動への喜びを感じ、自己有用感を感じる児童が増えた。これは、あいさつ運動や全校集会での発表など、児童が自主的・自発的に活動できる場を設定し、他の児童の喜ぶ姿を見て、「自分たちの力で学校をよりよくすることができた。」という実感をもつことができたためであると考えられる。(⑤より)
- 満足感を感じつつ生活する児童が増えてきたのは、活動の評価と振り返りにきちんと取り組んできたことで、自己効力感が高まったためと推察される。

(⑥より)

これらのアンケートを分析したところ、本校の児童の自己肯定感や回復力が高まっていることが伺える。

この二つの資質・能力は、他者とのコミュニケーション能力が育ったため、高めることができたと考える。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びその評価する理由)

- 協働的な学びを通して、話を最後まで聞く態度や相手を受容する態度が身に付き、互いの意見を聴き合える人間関係も築かれつつある。そのことで、授業中や生活の中で、失敗や間違いを恐れずチャレンジしようとする姿勢や失敗しても友達に助けを求めたり、前向きに活動に取り組もうとしたりする回復力の向上が見られるようになった。
- 授業中、友達の発言に対して「なるほど」「たしかに」「それいいね」と肯定的なつぶやきや反応を示す児童が増え、お互いを認め合う態度の高まりが感じられた。
- 授業で分からない問題があったとき、日々の生活で困ったときなどに「一緒に考えよう」「助け合おう」という意識の高まりが感じられた。また、友達の意見に対して「違う」と否定せず「～と考えるといいよ」とアドバイスをするなど、支え合い高め合おうとする姿勢が見られるようになった。

<1 学期終業式 児童発表より 抜粋>

- ブラインドサッカーというのは、目隠しをして、鈴の入っているボールを使ってやるサッカーです。ブラインドサッカーは、視覚障害という目に障害のある人がやるサッカーです。僕達は、ブラインドサッカーをやることで、視覚障害の人の立場に立つことができました。そのことで、目が見えないというのは、とても怖いことだということが分かりました。ブラインドサッカーをするというのは、すごい努力が必要だと思います。
- 宿泊学習では、林業体験やグリーンオリエンテーリング、野外炊飯などたくさんのことをやりました。その中でも楽しかったのは、キャンプファイヤーです。(中略) この宿泊学習では、ただ楽しかっただけでなく、仲間の大切さを改めて知ることができました。
- 2学期では、1学期にできなかったことにたくさんチャレンジして、失敗をしてもあきらめず、くじけずに、出来ることをたくさん増やす努力をします。

<宿泊学習へ向かう途中で見た常総市の水害についての児童作文より抜粋>

- ごみがたくさん山積みになって置いてあること、家がぼろぼろになっていること、人の住めない家や人のいない家がとても多くあることに驚きました。また、川も茶色く濁っていました。人のいない寂しい感じの所でした。常総市の人達は、辛い思いをしているのだと感じました。自分たちが宿泊学習にいかけて幸せだと思います。常総市の小学生は、勉強も出来ない日々を過ごしていると思います。他の人達にも被害のすごさを伝えて、常総市の人達の大変な思いを伝えることが出来ると思います。ニュースなどで聞くより、実際に目で見て伝えることが大事だと思います。
 - 近くなので、被害に遭った人と同じような気持ちになれます。色々な所で募金をしていました。僕も募金をしましたが、もっと募金をしたい気持ちです。ボランティア活動で自分達にも手伝うことができるので、できるのならやりたいです。
 - このような被害を受けたら復興が進む所もあるが、大半は余りあまり進まないと思う。特に、生活に必要な家と水、それに農作物の被害は取り戻すのに時間がかかるから、全ての人が協力して考えていかないと行けないと思う。「そこに住んでいた人ではないから関係ない」ではいけないと思う。
- ※ この作文のあと、5年生は、全校に向けて募金活動を呼びかけた。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

- 地域・保護者とともに、児童の人権教育に関する実践力を養っていけるよう協力体制を構築し、授業の改善・充実を図っていく必要がある。
- 発達段階に応じて、9年間を見通したカリキュラムの設定や異学年交流、地域への発信の機会を増やし、本研究を通して育成した資質・能力を更に伸ばしたり生かしたりする場を構築する必要がある。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

つくば市立並木小学校

各教室に人権コーナーを設置し、併せて全校児童の共用スペース（ハートフルランド）を設け、アクティビティや関係する書籍、絵本の展示など、人権意識を醸成するための意識的な環境整備に取り組んでいる。身近な生活場面を想定した「言葉かけ」を問うコーナーでは、児童が学校生活の中で遭遇しやすい事例場면을あげて、絵と吹き出しを描いたワークシートに記入できるようにするなど、相手の人間性を尊重する言葉かけの技能を身に付けるための工夫がなされている。人権集会（ハートフルフォーラム）の取り組みでも、実践発表の前にエクササイズが設定されるなど、細やかな配慮がうかがえる。人権教育の視点にたった学校づくり（人権教育の指導方法等の在り方について [第三次とりまとめ]）にむけて、意識的に取り組まれた事例である。